歯周組織再生療法　VS　抜歯−補綴対応
根先までアタッチメントロスが進行した重度の予後不良歯の治療に関して
ランダマイズド化された５年経過臨床研究

『Periodontal regeneration versus extraction and prosthetic replacement of teeth severely compromised by attachment loss to the apex: 5-year results of an ongoing randomized clinical trial』
Pierpaolo Cortellini,Gabrielle Stalpers, Aniello Mollo, Maurizio S. Tonetti
Journal of Clinical Periodontology
Volume 38, Issue 10, pages 915–924, October 2011

レントゲン写真上で根先部もしくは根先部を超えるまで進行した骨欠損があり、過度の動揺、再発を繰り返す歯槽膿瘍がある歯は、一般的に定められている臨床基準では抜歯が適用となる。本文献では、そのような要抜歯歯の中から無作為抽出によって選びだされた歯にさまざま歯周組織再生療法を適用させた場合、その予後は、実際に抜歯を行いブリッジやインプラントにした場合と比較してどれくらいの差があるのかを検証している。

その結果は、歯を敢えて保存した場合、多くの歯に動揺度の改善が見られ、５年以内に歯周病の再発によってやはり抜歯を余儀なくされた歯は２５本中に２本しかなかった。（５年生存率 92%）この結果は、一般的に信じられている抜歯の基準が絶対的な信憑性を持っていない事を表している。

他方、抜歯をして、インプラントやブリッジを選択した場合では、５年以内に支台歯の抜歯もしくはインプラントの撤去が必要となったケースはなかったが（５年生存率１００％)、アタッチメントロスが進行していた支台歯やインプラント周囲炎の影響かレントゲン写真上で骨の喪失が求められるインプラントも存在した。

歯周組織再生療法を成功させる条件が整っている場合には、従来の抜歯基準に従う必要は必ずしもなく、歯の保存にトライすることができることが明らかになった。安易に抜歯そしてインプラントへと流れる昨今の歯科事情に一石を投じる論文である。